

# 「能楽論」に見る曹洞五位説ついでの覚書（一）

— 『人天眼目』を中心として —

飯塚 大展

はじめに

私は、禅の種々の分野における影響をテーマとするプロジェクトに参加したことがある。刺激的な研究発表やその後の討議を通して多くの知見を得ることが出来たが、残念ながらそれを咀嚼できないままに、今に到っている。特に歌道論、能楽論に及ぼした禅の影響について興味を引かれたが、門外漢である私にとって、典拠の提示とその解釈に追いついていけなかったことに悔が残っている。それは、私自身が抱いた疑問を的確に表現することができなかつたからであるが、それでも若干の違和感を感じずにはいられなかつた。

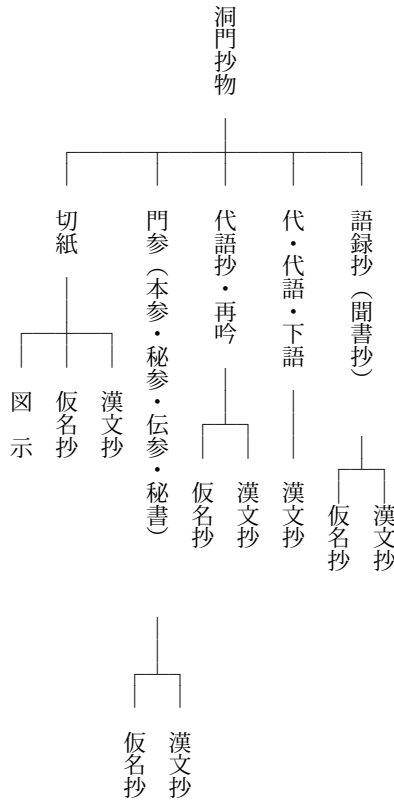
仮りに世阿弥以降の修道論の理論的背景に禅の教説があるとすれば、果たしてそれは林下曹洞宗において受容された「曹洞五位説」（以下「五位説」）なのか。「五位説」の影響があるとすれば、世阿弥が親近した可能性を有する岐陽方秀、その所属する東福寺山内の学統を念頭に置くべきなのか。<sup>1</sup> 同時代の林下大徳寺派（大応派徹翁義亨

派下)の養叟宗頤、春浦宗熙等の活動や、一休宗純等の言説に見るように居士禪の盛行に関連する<sup>(2)</sup>のか。私見によれば、この時代には既に五山と林下とを問わず、宋代以降の中国文献に見える五位説の理解は、一定の段階に達しており、更に日本的解釈を前提とする文献が成立していたのではないかと思う。世阿弥以降の「能楽論」における禪の体系、教学の理解は、禅籍抄物の分類では、碩学の禅者による講義を本とする「語録抄」や師資問の問答形式による口語体の禅問答を本とする「本参」(大応派下では「密参録」)に依拠していたのではないかと考える。

少なくとも中世後期における林下曹洞宗の教学の中心は、師資の間に相伝された切紙・本参による公案参究であった。これらの史料への参究は、曹洞宗道元派下の僧侶としての自己同一性を確保する一つの手段であったと言える。彼らは、むしろ『正法眼蔵』とは異なる道元の構築を時代的課題として担っていた。この時代の相伝史料において、道元の言説として語られる内容は、公案参究に関わる分野では「曹洞三位」・「曹洞五位」説であったし、葬祭を含めた儀礼の意味づけには、当時において機能していた顕密仏教の教えが、或いはその一部分とも言える神道・陰陽五行説等が縦横に援用されている。

ここでは、世阿弥以降の「能楽論」に影響を及ぼす可能性を有する『人天眼目』とその注釈書である『人天眼目抄』を中心として、林下曹洞宗における「五位」説について略説したいと思う。私の興味は、日本における禪の受容であり、特に室町時代後期、応仁文明の乱以降、林下曹洞宗諸派は急速に展開しており、世阿弥以降の「能楽論」に影響を与えたとされる、その仏教学的背景の一端を考察したいと思ったからである。その素材として禅籍抄物を用いたいと思う。以下に、「洞門抄物」の分類を参考として掲げたい。

洞門抄物の分類（石川力山氏の分類）



（一）語録抄（聞書抄）——禅宗典籍類の注釈書で、原則的には講義提唱したものを聴講者がそのまま筆録したものを意味し、聞書抄とも呼ばれる。したがって第一義的には仮名書き口語体の抄ということになり、洞門抄物の史料的特徴もこの点にあるが、抄を広い意味での注釈書とみるなら、若干の漢文抄もこれに含まれる。

（二）代語（代・下語・著語）——古則公案や機縁の語句、重要な詩句等に対して、中国以来の伝統的な方法である著語の形で語を付し、公案理解の一助に資したもので、時代が下ると仮名書きのものも出現する。形式としては、一則の公案を示し、拶語をもって学人に問いかけ、その答えがなければ、学人に代つて師家が著語を下すという手順を取る。

(三) 代語抄・再吟―公案に対して下された代語(著語)について、その出典や字義等を詳しく評釈注解したものであり再吟も同様の性格を持つものであるが、代語抄をさらに再吟味して注釈を付加した意と解される。

(四) 門参(本参・秘参・伝参・秘書)―中世曹洞宗における公案禅盛行の実態を伝える史料で、入室参禅・公案参得の手引書で、洞門抄物中でも最も多量の伝本が現存する。参禅の室内における師家と学人の問答応酬の仕方や、公案解釈の方法を書き留めたもので、伽藍法の伝授とともに伝えられる。

(五) 切紙(断紙)―嗣法三物に関する口伝や、葬送・供養などの諸儀礼、宗旨の秘訣、公案の要旨等を、一項目毎に一枚の紙に書きつけ、年記・伝授者・相承者を明記して秘密伝授したものである。

### 世阿弥の能楽論における「曹洞五位」説の引用について

世阿弥の能楽論に「曹洞五位」説(以下「五位」)が援用された可能性については、私見によれば、一定の留保が必要と考える。正位と偏位の対立において、事象や公案・透句を解釈するのは、禅籍抄物において頻出するところである。

香西精氏は、『拾玉得花』に見える一文、「一点付るは面白なり」が正偏五位説のひとつの圈續(図)に関連するとした。また、『花鏡』(応永二十八年へ一四二)七月以前成立)「爰を混せぬとも云ふ」の典拠を峨山韶碩の『山雲海月』に比定した。しかしながら、五位の思想は、五山と林下とを問わず曹洞宗の綱領(家風)として一定のレベルで理解されてきた。それを可能ならしめたテキストの一つが『人天眼目』であり、当時抄出された注釈書であった。日本における五位の受容については、後述する。

中世に書写された『山雲海月』の諸本、即ち円心寺所蔵本と丈六寺蔵本は、江戸期に板行されたそれとは本文に大きな異同がある。

円心寺所蔵本では、「不混」の用例は以下のように見える。

①真工夫用心者、不避物、不求物。工夫之伴侶捨却、孤俊風流之一句的當。天地未開闢前、孤俊未分之當位不混。又開代現今之上、孤俊万物不混、從劫至劫、自久遠実成、全孤風流俊逸者也。昔王位王德不染。中比、母胎合成ヨリ六、主作、六根不跡。一精明已見一其、不相混物也。

②不然者、宗用何所為。無面目之宗用アラス。法門無尽之中ニモ不混、只一真人

③然モ、為物不混不類間、故人靈然寂智名ケタリ。

④坐禪之二字子細点検、最妙最玄至極、道人作許汝、破断要津、不通凡聖大事也。細中細可弁。此鷲鷲立雪非同色云意也。自己一色之中ライテモ、不混主言頭タリ。ツレ物ナリ。

「不混」の語を術語として用いるべきなのであるうか。管見においては、特別な意味を有するかどうかは判然としない。但しこの箇所は、峨山の言葉として、他の文献にも見えるものである。

『山雲海月』の本文が引用されている例としては、『報恩録』下巻第十六則の抄文を挙げることが出来る。大安寺蔵『報恩録』（慶長十二年写）には、以下のように見える。

拾六、峩山和尚云、各向枯木前、聞老僧所分。驀直起座喝云、百雜碎孤峻<sup>一</sup>。破云、孤者、大極位也。峻者、一氣也。

又一氣トハ、却来ノ兒也。在共、十分ニハ不出也。又ハ、清濁ト分タヌ所ヲモ、一氣ト指ス也。本位也。百雜碎相見孤峻ノ一、此話家ノ大事也。峩山云、鳥含金口、兔抱黒子。鳥ハ日也、陽也。兔ハ、暁不墮義也。於此百雜碎之有投機。

孤峻更孤峻也、風流也。爰ヲ石頭大師モ、門々一切境、回互不回互ト云也。此ノ心ハ、六根門頭、一々対境、終不有一法、

回互ト云也。又ハ、天旣不露ト云也。不回互ト云ワ、不見見、不聞聞也。又云、娘生兒ヲ、其俛風流共見也。孤俊風流ノ一句ト云ハ、天地未開關前孤俊、未分不混也。又開代現今之上孤俊万物不混、從劫至劫、自久遠集成、全ク孤俊ニシテ風流ノ俊逸者也。孤俊風流ハ、先孤ノ二字、大極未備先ノ全底也。俊トハ、一氣未一氣之眼也。大極不識一氣、々々不識大極、兩処共ニ不識、相通也。全底有也。是虚明白共云也。孤二字不識孤之字、俊之二字不識俊二字也。此故孤俊之全底ハ不識也。是本来面目也。是現成面目也。古今孤俊ト成耳ミ也。宗門堪秘大事也。此百雜碎相見、孤俊之二ト云事ハ、自今以後、真難心得事也。吾家之大事、不過之。夫百雜碎用事、大方休処・死底、初入頭・脱落辺不可用。百雜碎云ヘエバトテ、可破物碎却、別物不可殘。自未分本来、運今時四大合成之歩、心佛二歩之外、何物連云々。子細、又青山卷在之。

大安寺藏『報恩録』の註記の傍線部分は、ほぼ円応寺藏『山雲海月』本文と一致するものである。峨山の語とされるものが、本参、切紙等の形で受用されていたことを考慮すれば、『山雲海月』に限定することはできないと思う。

香西氏は、また、補嚴寺文書の分析を通して、世阿弥の第二世竹窓智嚴への入室参禅（参学）並びに、檀越としての關係性を明らかにした。現時点で私は、世阿弥と同時代の太原（宗真）派下了堂（真覚）派の教学体系は明らかにし得ないが、大谷大学図書館所藏『敲門瓦集』をその様相を知るための参考史料として紹介してみたい。

『敲門瓦集』は大龍栄樹によって編まれた漢文体を中心とする本参史料である。大龍は大源門徒の了堂派月山禅宗和尚の法嗣であり、室町時代最末期における公案体系、並びに参学の内容を知ることが出来る。大龍は自らその参学過程を以下のよう記している。

○丹波州船井郡龍穩開山月山禅宗大和尚、在ヲ大和州宇多郡秋山アイコウ愛谷山興運禅寺ト、於天文元壬辰歲五月廿六ハ甲戌ケ日ニ、初メ参ル月山和尚ニ、即示シ榮樹ニ曰ク、於テ太容門中ニ、初メ轉凡入聖ニ話ス。○先師廬月大和尚モ始メ

而示禪宗此話。我今示榮樹。へ此歳、予廿八歳也。十七歳而通光徳寺之佛法、十九歳而於賀州栢樹林大乘寺通明峯大和尚之資、珠岸派之佛法而為首座、廿二歳而於山城州小野瑞升院逢大周和尚、通梅山派之佛法、廿四歳而於伊勢州白子龍源寺逢江南和尚、通碧岩百則、得大龍別稱。然雖如レ是機縁熟而成大源門徒了堂派月山和尚之真子ト。

これによれば、大龍は、大源門徒了堂派月山禪宗和尚の法嗣であることが解る。天文元年（一五三〇）年以降の参学内容を有する了堂派本参である。

以下にその公案目録を掲げる。

### ○目録

第一、轉凡入聖、第二、露柱之参、第三、趙州狗子、第四、世尊拈花、第五、平常是道、第六、不思善惡、第七、不是心佛、第八、非心非佛、第九、智不是道、第十、達磨安心、十一、法眼示機、十二、應無所住、十三、阿誰話、十四、無位真人、十五、瑞岩主人公、十六、岩頭嘘声、十七、千尺井中人、十八、瓶中出鵝参、十九、國師三喚、廿、洞頭山中人、廿一、神道内外宮参（十二則）、廿二、出入息利、廿三、息上見佛、廿四、念佛往生之参、廿五、出下未分、廿六、香巖擊竹、廿七、香巖樹上話、廿八、大通智勝佛、廿九、見明星悟道、卅、東山水上行、卅一、大死底之話、卅二、趙昴地獄話、卅三、牛過窓櫺、卅四、女子出定、卅五、神道極秘（十一則）、卅六、萬不侶話、卅七、大力量人、卅八、唯我独尊佛、卅九、百丈野狐、四十、俱胝一指話、四十一、鬚子無鬚、四十二、本来人話、四十三、祖師心印、四十四、倩女離魂、四十五、文殊三所、四十六、二鬼問答、四十七、竿頭進步、四十八、格外之参、四十九、耀倒淨瓶、五十、路逢達道、五十一、紙燭吹滅、五十二、體露金風、五十三、乾屎橛話、五十三、屠刀揚下話（九則）、五十四、婆子燒菴、五十五、石鞏弓話、五十六、丹霞木佛、五十七、戒体之参、五十八、百匝

千重話、五十九、雲門須弥、六十、妄智寂話、六十一、智不到參、六十二、大圓覺話、六十三、諸佛吞盡、六十四、奚仲造車、六十五、外道問佛、六十六、芭蕉拄杖、六十七、首山竹篋、六十八、乾峯一路、六十九、兜率三閔、七十、最初三段、七十一、臨濟四喝、七十二、四料揀參、七十三、雲門五良久、七十四、趙劬栢樹、七十五、花藥欄、七十六、樹杉子、七十七、洞山麻三斤、七十八、青原廬陵米、七十九、即心是佛、八十、人々佛性、八十一、虛空五字、八十二、飯錢之話、八十三、趙州洗鉢、八十四、南泉斬猫、八十五、二僧卷簾、八十六、達磨四哲、八十七、青黃六段、八十八、六祖風幡、八十九、見桃悟道、九十、没后作僧、九十一、迦葉刹竿、九十二、袈裟囊參、九十三、鐘声七條、九十四、指頭等破、九十五、却來之參、九十六、以紹為家、九十七、一遍消災呪、九十八、鉞忍上參、九十九、孤峯不白、百則、三身四智話、百一、石霜七去之參、百二、宏智前八句、百三、後八句、百四、王子五位參、百五、正偏五位、百六、功勳五位參、百七、君臣五位參、百八、体用五位、百九、家傳夜參、百十、同選取句參、百十一、浮山九帶、百十二、傳授儀軌、百十三、佛陀勃地參、百十四、佛祖的傳、百十五、諸天神明、(百) 十六、傳授軌、(百) 十七、國王授戒、(百) 十八、儀軌參、(百) 十九、碧岩百則(人天眼目參別記之、

上記は「轉凡人聖語」を「首古則」とする公案の体系である。傍線部が、「五位」に直接に關係する話頭であるが、別の公案においても、「五位」は解釈原理として機能している。

傍線の「五位」の公案は「曹洞一家」の大事「二十五位之參」と総称される。以下に「曹山五位君子訣」「洞山和尚功勳五位」「百六、△洞山和尚功勳五位」「石霜諸答五位王子」を取り上げる。

○筠州洞山良价禪師者、會稽人也。姓者、喻氏得法於洪荔雲岩曇晟禪師。權開君臣偏正二十五位、善、接三根。大ニ開ニ音ヲ廣ク弘ニ萬品。横ニ抽ニ寶釵ヲ、剪ニ諸見ヲ稠林ニ、妙ニ叶ニ該通、截ニ万機ヲ穿鑿、晚ニ曹山本寂禪



師深明の旨、妙唱嘉猷へ彼一着子、道合君臣、偏正回互、由是洞上ノ玄風播於天下、故諸方ノ宗匠、共ニ推尊テ之ヲ、謂曹洞宗耳。僧問曹山五位君臣旨訣。山ノ曰、正位即屬空界。本來无物。偏位即屬色界。有二方形ノ像。○偏中至者、正中偏、捨テ事ヲ入理ニ背理ノ就事。正中來者、偏中正、背理ノ就事ニ捨テ事ヲ入理。兼帶者、冥ニ應ニ衆縁。不レ隨セ諸有二。非染ニ非淨ニ、非正ニ非偏。故ニ曰虚玄大道、无着ノ真宗上。從上ノ先德、推テ此一位ヲ、最妙最玄トス。要當ニ審辨明レトコトヲ。君ヲ為ニ正位ト、臣ヲ是レ偏位。○臣向ウ君ニ、是レ偏中正。○君ミ視レ臣ヲ、○正中偏、君臣道合、是兼帶ノ語也。問、如何カ是レ君。曰ク、妙德尊ニ寰宇ニ、高名ホコラカク大虚。問、如何カ是レ臣。曰ク、靈機宏ニ聖道ヲ、真智利ニ群生ヲ。問、如何カ是レ臣向ウ君。曰ク、不レ墮諸ノ異趣ニ、疑(凝カ)レテ情ヲ望聖容ヲ。問、如何カ是レ臣視レ君ヲ。曰ク、妙容雖レモ不レト動セ、光燭不無レ偏。問、如何カ是レ君臣道合。曰ク、混然無内外、和融上下平ナリ。又曰ク、君臣以ニ偏正ニ言者、不レ欲レ犯レ中、故臣稱レ君ニ不レ敢、斥言、是也。此ヲ是レ吾法之宗要也。黑白未分、難レ為ニ彼此。玄黄之後方、位ス自他。於是借黒權正、假白示偏。正不レ坐正、夜半虚明。偏不レ坐偏、天曉陰晦。借レ黒、正中來、假レ白、偏中至也。正不レ坐正者、正ヲ必ス不レ正、却テ有レ偏也。夜半虚明者、正偏也。天曉陰晦者、偏中正也。全体即用、枯木花開、全用即真、芳叢不レ艷。々々者、美好也、色ナリ。体用説ニ出ス兼帶ヲ、摧殘兼帶ヲ、及ヒ盡シ玄微ヲ、不レ立テ物外ノ義也。玉鳳金鸞、分疎不下、有無俱ニ混。難レ分テ玉鳳金鸞、不レ用レ分鳳鸞。大用現前、不レ存軌則、々々(則)兼帶分疎不下之儀也。是ノ故威音那畔休語ト如何ト。禪門以テ威音已前ヲ為ニ實際理事ト。以テ已後ヲ為ニ佛事門ト也。曲ヲ為ニ今時ノ由レ人ニ施設ス。畧陳ニ管見。以テ示三方隅。管見者、目ヲ窺レ天ヲ也。以テ小ヲ量レ大ヲ也。方隅者、五位差別也。翼諸同志、幸ニ母レ拊レ掌。曹山曰、正者、黑白未分、朕兆未生、不レ落諸聖位ニ、偏者、朕兆興來ル故ニ、有ニ森羅萬像、隱頭妙門ト也。

百六、△洞山和尚功勳五位、

向・奉・功・共功・功々。僧問ソツト、如何カ是レ向。洞山曰々、喫飯ウ時作麼生是レ正中偏。誕生、内紹、黑白未分フ時、背レ理ニ就ク事ニ、君視レ臣ヲ、主中ノ賓也。僧問ソツ洞山ニ、如何是奉。山曰、背ノ時作麼生是偏中正。朝生マ、外紹、君位、捨スレ事ヲ入ルレ理ニ、臣向レ君ニ、賓中主也。如何カ是レ功。放ニ下ス鉏頭ヲ時キ、如何シ是レ正中來。未生、隱栖、君ニ視レ臣ヲ。無句有句、正位、君位、主中ノ主也。如何是レ共功。師曰、不得レ色ヲ是偏中正。化生神用、臣向レ君ニ、各ノ干ニ、偏位、君位、賓中ノ賓也。如何是レ功々。師曰々、不共是兼中到、内生、不出、君臣道合マ、不當頭ニ、非正ニ非ニ偏ニ、出格自在、離ニ四句ヲ、絶ニ三百非ヲ、妙盡テ本無妙也。

百四、○石霜諸答五位王子ハ石霜ノ慶諸禪師ワ、道吾宗智之法嗣也。葉山儼ノ孫ナリ。

如何是誕生王子ハ嫡子也。儲君ノ之位也。答曰々、貴裔エ非ス常ノ種ニ、天生位ニ至ス尊ニ。如何カ是レ朝生王子ハ宰相之子也。答曰々、白衣為ス足ヲ輔ニ、直ニ指ス禁殿中ヲ。如何カ是レ末生王子ハ將軍ノ位也。答曰々、修途方ニ覺レ貴ニ、漸進テ不レ知レ尊ヲ。如何カ是レ化生王子ハ群臣之位ナリ。答曰々、正威無シ況マ、神用莫シ能レ儔コト。如何是内生王子ハ非ス儲君也。答曰々、重幃ニ勝負ヲ、金殿臥ニ清風ニ。王子者、即チ無位ノ真人也。借テ五行ヲ為シ用ト、總修ス五德ヲ、世界相續テ而以テ木火土金水ヲ、為シ天下ニ王ニ。誕生者、金位也。位イ居ニ西方ニ。朝生者、木位也。位イ居ニ東方ニ。未生者、水位也。位イ居ニ北方ニ。化生者、火位也。位イ居ニ南方ニ。内生者、土位也。位イ居ニ中央ニ也。誕生王子者、東宮之從也。貴ケレドモ未居レ位ニ。朝生王子者、真化シ廣ク領ス天下ヲ、但將軍ノ位者ハ劣ル。然共ニ民貴ト之ヲ。末生王子者、陰栖謂フ不レ陰、為シ胎物也。不レ知レ男共ニ女共ニ、歷然ト而一氣生ス當位也。化生王子者、父母ノ不レ識シ儲ヲ王子也。内生者、父母未ニ和合ル以前種子也。

●正中偏〈誕生・内紹〉君位 向 黑白未分 嫡子也 正部ナリ

○偏中正〈朝生・外紹〉臣位 奉 露□□幸相位ナリ 偏部ナリ

正中來 師示曰、如何是正中來。予云、於正内看来則ハ、王也抱玉ヲ。師曰、伏請着語セヨ。予云、氷河ニ發  
ホクワ 烈焰。先行テ不レ到マ、末後大ニ過ク。六月滿天ノ雪キ。滿面ノ風埃鬢已ニ秋ナリ。拍レテ手ヲ呵々大笑。當頭獨リ露ルは何ニ物

ゾ、又、臘月火中ノ蓮。猛烟堆中ニ雪片飛フ。今日看来レバ、火裡ノ氷。寒氷吐レク火旧家ノ風セ。紅爐一点ノ雪キ。披毛戴角異  
中ヨリ來ル。荇花明月不レ似他。一足垂下。春花裡浪花ノ間タ。妙体堂々不レ露レ顔。火裡ニ生レ蓮ヲ総ニ不壞。

兼中至 師曰、如何是兼中至。予云、乍レニ生レガアル竒瑞ノ字浮子ノ程、可ニ成レ王ニ事ヲ必定也。師曰、伏テ請ウ着語  
シテ。平明騎レテ馬ニ入ル金門。馳レ書不レ到家。玉壺裡ニ有リ長安路。東宮 雖ニ至嫡カリト、未レタ面ニ聖堯ノ顔ニ。玉馬

過レク関ヲ正平夜。又、頭雖レト戴ト烏沙ノ帽ヲ分心蓮華這裡ノ人ト、赤身ニ奉レル上則ハ、氣似リ嚴霜烈ニ綱記ニ禁庭ニ則ハ、  
於風行草偃ス。移レテ歩ヲ到レ裡頭。銀臺紅色影ケ交リ光リ、毘佛笙歌シテ畫堂。臣向レテ君ニ猶ヲ帶フ奉重ヲ。又、威儀儼

然、有ニ長安趣。光中ニ有路天然異ナリ。貴未ニ必ス聖ナマ、壽ナラレトモ未ニ必シモ仁トセ。臣轉レテ身ヲ以テ合レ君。四相  
排斑シテ立テ、凝レテ情ヲ望ム聖容ヲ。移レテ歩ヲ向ウ長安。

兼中到 師示曰、如何是兼中到。予云、自リ無始劫一來(未カ)是レ帝王ニ。師曰、乞着語給マエ。繩短シテ深淵難  
ヲカヘイ。又、

○正中來 君視レル臣ヲ 功 無句有句 將軍 露柱

●兼中至 君視レル君ヲ 共功 各ノ不ニ相干 群臣 自己

●兼中到 君臣合 功々 非ニ儲君ニ 那邊

しかし一般的には、仮名抄の本参史料が後世の主流となる。例えば最福寺藏『真巖派傳後参』には、

洞山五位。師云、正中偏ヲ。代、止々。師云、恁麼時如何。代、正<sub>ニ</sub>在<sub>ル</sub>偏<sub>テ</sub>走。師云、恁麼時如何。代、正位雖為  
正還偏、々位雖為偏却正。師云、畢竟ヲ。代、閉目良久。

偏中正。代、止々。師云、恁麼時如何。偏<sub>ニ</sub>在<sub>ル</sub>正<sub>テ</sub>走。師云、恁麼時如何。代、君臣以<sub>レ</sub>偏正<sub>ニ</sub>言<sub>コト</sub>ハ、不<sub>レ</sub>欲<sub>ニ</sub>中犯  
莫。師云、畢竟如何。代、良久。

正中來ヲ。代、一圓相作<sub>シテ</sub>点。師云、恁麼時如何。代、莫道鯤鯨<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>羽翼<sub>ニ</sub>、今日親從鳥道來。師云、鯤鯨ヲ。代、  
中<sub>テ</sub>走。師云、中ヲ。代、立身叉手。師云、翼<sub>ヲ</sub>羽<sub>ヲ</sub>。代、偏正<sub>テ</sub>走。師云、羽翼<sub>ヲ</sub>何<sub>ント</sub>動<sub>カ</sub>シタ<sub>ゾ</sub>。代、一相  
作<sub>シテ</sub>点。

兼中至ヲ。代、偏<sub>ノ</sub>極位<sub>テ</sub>走。師云、恁麼時如何。代、蒼天<sub>ノ</sub>。師云、恁麼時如何。代、君臣合道。師云、蒼天  
与<sub>ニ</sub>君臣<sub>ニ</sub>合道<sub>ト</sub>ヲ、説破合成セヨ。代、蒼天<sub>ノ</sub>ト<sub>ノ</sub>經<sub>ヲ</sub>尽<sub>シテ</sub>コソ、君臣合道シヨウズレ。

兼中到ヲ。代、不<sub>レ</sub>欲<sub>ニ</sub>犯<sub>ニ</sub>莫<sub>ヲ</sub>。師云、恁麼時如何。代、空王殿上絶智音。師云、絶智音<sub>ヲ</sub>時如何。代、玉殿苔生。師  
云、玉殿苔生ヲ。代、無位<sub>テ</sub>走。師云、無位<sub>ヲ</sub>。代、只去。

同頌、正中偏ヲ。代、暗中有明。師云、三更初夜月明前<sub>ト</sub>云意旨如何。代、三更<sub>テ</sub>モ無<sub>ク</sub>、初夜<sub>テ</sub>モ無<sub>ク</sub>、月明<sub>ノ</sub>  
前<sub>テ</sub>モ走<sub>ヌ</sub>。師云、サテハドコゾ。代、中<sub>ヲ</sub>犯<sub>シ</sub>走<sub>ヌ</sub>。師云、承當ヲ。代、立身叉手。師云、莫<sub>レ</sub>恠<sub>コト</sub>相逢<sub>不<sub>ニ</sub>相<sub>イ</sub>知<sub>ラ</sub></sub>  
ト云意旨如何。代、正<sub>ヲ</sub>主<sub>与<sub>ニ</sub>偏<sub>主</sub></sub>相逢<sub>テ</sub>走。師云、隱々<sub>ヲ</sub>云エ。代、正<sub>ノ</sub>主<sub>ヲ</sub>バ正<sub>ノ</sub>主<sub>ニ</sub>藏<sub>シテ</sub>走。師云、猶懷<sub>ニ</sub>  
旧日娟<sub>ヲ</sub>云エ。代、元<sub>ノ</sub>足<sub>上<sub>ニ</sub>立<sub>皈</sub></sub>走。

偏中正ヲ。代、明中在暗。師云、失曉老婆逢<sub>ニ</sub>古鏡<sub>ニ</sub>。師云、古鏡<sub>ト</sub>ハ、ドコゾ。代、驀<sub>午</sub>ノ頭<sub>テ</sub>走。師云、老婆<sub>ト</sub>  
云ハ、ドコゾ。代、夜間<sub>ノ</sub>青女<sub>未<sub>レ</sub>登<sub>レ</sub>機<sub>時</sub></sub>節<sub>テ</sub>走。師云、逢<sub>ニ</sub>古鏡<sub>時</sub>如何。代、老婆<sub>ガ</sub>夜間<sub>ノ</sub>青女<sub>逢<sub>テ</sub>走</sub>。師云、分明

觀面無<sub>二</sub>更他<sub>一</sub>、更迷<sub>レ</sub>頭猶<sub>ラ</sub>休<sub>レ</sub>認<sub>コトヲ</sub>影<sub>ヲ</sub>ト云意旨如何。代、眼開テ亦和<sub>シテ</sub>云、白全熏。

正中來ヲ云エ。代、偏中相柱エタルガ、正中來<sub>テ</sub>走。師云、無中有<sub>レ</sub>路出<sub>ニ</sub>塵埃<sub>ヲ</sub>時如何。代、無中カ路ナ呈<sub>ミ</sub>コソ、塵埃ヲ出<sub>テ</sub>走。但能不<sub>レ</sub>觸<sub>レ</sub>當今ノ諱<sub>ニ</sub>也。勝<sub>ニ</sub>前朝斷舌才<sub>ニ</sub>。師云、不<sub>レ</sub>觸<sub>シテ</sub>ハ、何<sub>レ</sub>ト云ヲウズゾ。代、農老農夫無<sub>レ</sub>此話<sub>一</sub>。師云、無<sub>レ</sub>此話<sub>一</sub>時如何。代、喫茶喫飯。

兼中至。兩刃交<sub>レ</sub>鋒<sub>ヲ</sub>要<sub>ス</sub>回避<sub>ト</sub>云意旨如何。代、夢<sub>見</sub>シテ云、兩刃鋒ヲ交<sub>テ</sub>走。師云、恁麼時如何。代、良久。師云、好手還同<sub>ニ</sub>火裏蓮<sub>ニ</sub>ヲ。代、手<sub>ナ</sub>ツケソ。師云、宛然<sub>トシテ</sub>自冲<sub>レ</sub>天有<sub>レ</sub>氣ヲ。代、只去。師云、ソレハ何<sub>ニ</sub>トテ。代、足<sub>ニ</sub>任<sub>テ</sub>去<sub>テ</sub>走。

兼中到。師云、不<sub>レ</sub>落<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>誰敢和<sub>ト</sub>云意旨如何。代、代、偏正一如。師云、人々尽欲出常流、折合終<sub>ニ</sub>販炭裡坐<sub>シ</sub>用ヲ。代、良久。

○総頌 師云、無中有路透長安ヲ。云、ツクシノ者、北國者、東海道者、皆長安<sub>ニ</sub>透ルト見レバ、五位一心<sub>テ</sub>走。師云、劫外靈枝孰敢攀、寶殿苔生尊貴盛<sub>ナリ</sub>、三更紅日黑漫々ヲ。代、何<sub>ニ</sub>モ類<sub>シ</sub>走又。

此頌者、以<sub>レ</sub>翼派ノ事也。正中偏、三更初夜月明前ヲ。代、三更<sub>カ</sub>トスレバ、月明前、終<sub>ニ</sub>夜半ヲ犯<sub>シ</sub>走又。師云、莫<sub>レ</sub>枉<sub>ニ</sub>相逢相不<sub>レ</sub>知。師云、何<sub>ニ</sub>相逢<sub>タ</sub>ゾ。代、主<sub>与</sub>主<sub>ニ</sub>相逢<sub>テ</sub>走。陽<sub>主</sub>ト陰<sub>ノ</sub>主也。師云、陰<sub>タ</sub>ー娟。師云、何<sub>ト</sub>抱<sub>タ</sub>ゾ。代、請良久。師云、偏中正ヲ。代、失曉老婆逢<sub>古</sub>鏡。師云、古鏡ヲ云。代、陰<sub>ガ</sub>次第<sub>ノ</sub>衰<sub>テ</sub>、暮<sub>午</sub>日<sub>ニ</sub>至<sub>テ</sub>走。師云、分明觀面更<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>他<sub>ヲ</sub>云エ。代、此時分明更<sub>ニ</sub>他<sub>ハ</sub>走又。師云、更迷<sub>レ</sub>頭認<sub>コトヲ</sub>影<sub>休</sub>ヨト云タル幾ヲ。代、頭<sub>ト</sub>モイハヂ。師云、正中來、無中有路出<sub>ニ</sub>塵埃<sub>ヲ</sub>。代、云イヂウ<sub>ノ</sub>トシテハ、錯<sub>テ</sub>走。師云、當今ノ諱<sub>ニ</sub>觸<sub>レ</sub>ヌ者ヲ。代、濃老濃夫<sub>テ</sub>走。師云、勝<sub>前</sub>朝斷舌才<sub>ニ</sub>ト云々幾ヲ。代、樵歌木笛、イツ犯<sub>シ</sub>タコトノ走。師云、兼中至。師云、兩刃交<sub>レ</sub>鋒<sub>ヲ</sub>要<sub>ス</sub>回避。代、陰陽ノ二ツデサ々エタ時、ドコエ回避<sub>シ</sub>走ズ。師云、好手還同<sub>ニ</sub>火裡蓮<sub>ニ</sub>。代、好手ナ

ホドニ、手ガツケラレ走ヌ。師云、宛然自冲天有気ヲ。代、好手ノ勢ガツウツト透テ走。師云、兼中到。師云、不落有無誰敢和ト云々幾ヲ。代、有無落ヲヌ処ヲバ、誰カヨツテ和シ走ズ。師云、人々尽欲出常流。代、出ヅトシタハ、錯テ走。師云、折合終飯炭裡座ヲ。代、偏与正折合テノ落居ガ、炭裡テ走。師云、炭裡定ヲ。代、日ハ南方ヲツカサドリ走。

総頌 師云、無中有路ヲ。代、中ヲ以テ路トシタ時、五位畢竟一位テ走。師云、一位ヲ。代、無位テ走。師云、長安ヲ。代、無位ガ長安テ走。師云、靈枝ヲ云。代、靈枝ガ中心ノ□樹枝テ走。師云、攀ヨウヲ。代、中心ノ四樹枝ヲバ誰ガ依テ攀ジソウズ。師云、宝殿ヲ。代、空王殿テ走。師云、苔生シテ尊貴昌ナリヲ。代、空王殿ナ呈、苔生昌ニ走。三更杲日黒漫々ヲ。代、三更カトスレバ杲日、カトスレバ黒漫々、終ニ中ヲ犯シ走ヌ。師云、五位畢竟ヲ。代、五位畢竟ハ、苟萌<sup>カクモウ</sup>以テ二字ヲ建立シテ走。師云、夫レヲ説破セヨ。代、終テハ始、始テハ終、終ニ間断ハ走ヌ。

五位外有兼中圓ヲ云エ。代、偏正不到共言ヌ処テ走。師云、不<sup>レ</sup>言、処ニ參ゼヨ。代、夜明簾外。師云、夜明簾外ヲ。代、簾外ノ外ハ、内外ノ不<sup>レ</sup>外ニ。師云、内外ノ不<sup>レ</sup>外ニ処ヲ。代、後ムイテ、師ノ前ニ座。師云、其心ヲ。代、無向無背理事泯絶。師云、泯絶時如何。代、前向テ忘然トシテ坐ス。師云、夫レハ何ゾ。代、是迄テ走。師云、其下デ、兼中至・兼中到一々ニ云。代、只去。真巖派<sup>三</sup>則五祖是也。

中世林下曹洞宗において、「五位」説受用の主なテキストは『人天眼目』であった。

## 『人天眼目』の成立と開板

漢文体の『敲門瓦集』においても、「人天眼目の参、別に之れを託す」とあつたように、「本参」・「切紙」等の相伝史料に依拠して、「五位」説は受用された可能性が高い。上掲の『真巖派傳後参』は、後述の川僧慧濟と同じ門流に相伝された仮名の本参史料である。林下曹洞宗においては、「語録抄」と「本参・切紙」とは、相互補完的關係にあり、伝法（嗣法）の中心となるのは、後者であつた。

『人天眼目』六卷は、大慧下四世とされる晦巖智昭（生没年未詳）の編著であり、淳熙十五年（一一八八）に成立した。その内容は、五家の宗旨の綱要書であり、臨濟、雲門、曹洞、瀉仰、法眼の順に、宗派ごとに分類し、はじめに各派の宗祖の略伝を掲げ、その派の祖師の語句、偈頌等の重要なものをまとめ、最後に「宗門雜録」において、禅宗史伝の考証、その他の補遺事項を集め、巻尾に慧昭可光の跋を付している。

宝祐六年（一二五八）に、物初大観が重修し、元の延祐四年（一二二七）に再刊された。早く日本に伝わり、すでに乾元元年（一二〇二）に五山版が開板されている。

その成立は、晦巖の自序によれば、『人天眼目』は禅宗五家の綱要書として、南宋、淳熙十五年（一一八八）に、開板された。編集の動機は、嘗て自分が行脚僧として、諸師に参じて五家（臨濟、雲門、曹洞、瀉仰、法眼）の綱要を尋ねたが、その主要な項目すら一致しないことが多かつた。智昭は慨嘆して言うことには、師家の身となつて、各宗の綱要の語句すら知らないのだから、宗旨などは及びもつかない、何をもつて後進の修行僧の眼を開かせることが出来ようか。かくして各宗の綱要に意を用いることほぼ二〇年に及んだ。その間、勉めて祖師の遺録や碑文、尊宿の拈提・頌古を採録して、五宗の綱要を記録するままに大部の書となつたが、これを校訂しまとめる余裕がなかつた。ようやく晩年にかかり、天台山万年寺に落ち着くことによつて、始めて嘗ての目的を遂げることが出来た。祖師の語句を編纂し、五宗の綱要として人天眼目と名付けた。所収の語句は、諸尊宿の述作そのものであり、その

内容は先師の接物利生にはかならない。いやしくも師家たる者は、この書無くしては宗旨の真偽を分かつことは出来まい。この書を読み五家の綱要を弁えた者は、必ず印可されるであろう、と。

上記のように、晦岩智昭は、五家の綱要書である『人天眼目』を強い矜持をもって著したことが分かる。しかしながら、寛永十二年刊『人天眼目抄』（漢文抄）によれば、晦岩智昭その人については、不明な点が多い。物初大観（一一〇一～一六八）『重修人天眼目集後序』（『物初牘語』巻二三）によれば、『重修人天眼目集』は、南宋、宝祐六年（一二五八）に重修開板された。智昭の『人天眼目』は広く叢林に受け容れられ、重視されてきた。しかし、その相伝抄出される間に、訛訛を生じた。その結果、多くの修行僧がその真意を理解せず、いたずらな教義問答に終始する、言語の窠窟という大病を発症してしまった。毒藥變じて藥となるではないが、言語の病をこの『人天眼目』の言語によって対症治療しようというのが、重修の意図である、とする。

日本における『人天眼目』の受容については、早くから覆宋（元）版として五山版が刊行された。五山版は乾元元年（一二〇二）に始まる。桂堂瓊林の跋文に拠れば、了郢禪人が『景德伝灯録』以下の灯史、五家宗派の諸尊宿の語録との対校を行い、『人天眼目』の厳密な校訂本（真本）を作成し、淨智道人がその刊行者となったことが分かる。桂堂瓊林について、諸注釈書は、虚舟普度の法嗣とする。『延宝伝灯録』巻三に拠れば、瓊林は、文永年中（一二六四～一二七五）に入宋（入元）し、径山の虚舟普度に参じ、嗣法した。また、虚舟より付法偈とその真贋を得たことが分かる。勝林寺は洛東草河にあり、北磻居簡の法を嗣いだ天祐思順が開山である。鎌倉時代末期、帰朝した瓊林周辺では、禅籍の開板事業が行われていた。瓊林が関与したと思われる五山版の一つに、『虚舟普度語録』があり、瓊林はその序を書いている。元版は、天峰致祐の後序に拠れば、元代、延祐四年（一二二七）に重刊されたことが分かる。この重刊本は、明版にも引き継がれており、更にこれに依拠して、承応三年（一二五四）、中



栴市右衛門が『人天眼目』三冊を刊行している。明版『人天眼目』に關連して言えば、永樂十九年（一四二）の空菴宗照の跋を有するものに、長野県塩尻市長興寺所蔵『人天眼目抄』・西福寺所蔵本等がある。又、朝鮮半島においても、『人天眼目』は多くの版本が刊行された。高麗版『人天眼目』は、わずかに東洋文庫所蔵本（零本）、積翠軒文庫旧蔵本が知られるのみであるが、その構成は上述の諸本とは異なる点がある。

## 日本における『人天眼目』の受容

漢文の下語による注釈という形式は、室町時代の比較的早い時期から存在したと思われるが、入室參禪を主とする公案禪の性格がより濃厚になる応仁・文明の乱以降、それ以前には『天童小參録』『自得慧暉録』『劫外録』等、曹洞宗に属する禪者が表した典籍に対する註釈の語録抄が多く抄出されるという傾向があったのに対して、曹洞宗とは直接関係のない典籍、特に公案集である『碧巖録』『無門関』や綱要書『人天眼目』等が多く抄出されるようになって来る。

道元は『正法眼蔵』仏道の巻において、五家の宗派を設定し、それぞれの家風を機関に代表させ、それを範疇として分類した中国禪宗の綱要書である『人天眼目』を批判している。<sup>3</sup>そこには、『人天眼目』において取り上げられた臨濟・曹洞宗の機関説批判であり、『人天眼目』及びその編者である智聡（智昭）にたいする激烈な批判が見える。

中世林下道元派下において、『人天眼目』の注釈者として權威を持つことになる川僧慧濟（?～一四七五）は、この道元の言葉をどう受けとめたのであろうか。私見に拠れば、川僧は『人天眼目』における大慧の解釈に対する道

元の批判と位置づけているようである。少なくとも道元の言説をふまえた上で、川僧は『人天眼目』を講義していたことがわかる。また、大谷大学図書館所蔵『無尽集』にも、道元による『人天眼目』批判の記事が見られる。因みに龍谷大学図書館蔵『大徳寺夜話』によれば、『人天眼目』を道元同様批判した禅者に、大灯国師宗峰妙超がいる。そして、大照禪師（養叟宗頤）も同調しているのであるが、養叟は東京大学史料編纂所蔵本『人天眼目川僧抄』（以下「史料編纂所本」）の識語に見える春浦宗熙の師に当たるとは、推定される。

遠州一雲斎三世川僧慧濟（？～一四七五）が文明三年（一四七二）から同五年にかけて行った講義の聞書抄とされるものが、現在、松ヶ岡文庫蔵本、足利学校遺跡図書館蔵本、史料編纂所蔵本の三種類知られている。

管見によれば、川僧抄の影響を受けて成立した『人天眼目抄』に以下の諸本がある。（1）「長興寺蔵本」写本三冊・西福寺蔵本」写本六冊、雷沢宗梭撰述。西福寺蔵本の奥書によれば、天文三年（一五三四）才応総藝書写本を永禄十年（一五六八）に転写したものであり、川僧抄の強い影響下に成立したものとされる。（2）龍泰寺蔵本、写本一冊、雲門宗と曹洞宗部分の注釈。川僧抄を継承するとともに、批判的検討を加えて自説を展開している。（3）輪王寺天海蔵本（『人天眼目聞書』）三卷三冊、享禄五年書写。常州佐竹において天江東岳の書写によるもの。（4）永平寺蔵本、写本一冊、江戸時代初期書写か。雲門宗と曹洞宗部分の注釈。ほかに、江戸時代にはいると、万安英種のものどされる『重修人天眼目綱領集鈔』（漢文抄）と同（仮名抄）とが開板されている。

道元の『人天眼目』に対する批判にも関わらず、道元の法孫は極めて早い段階から『人天眼目』への参学が始まっている。どちらかと言えば積極的に『人天眼目』を受容し、曹洞宗の宗風に位置づけられた五位の思想に注目していったと言える。『人天眼目川僧抄』成立以前の状況について略説したい。『一華開五葉』（六地藏寺蔵）はその内題に「峨山和尚人天眼目代」とあるように、『人天眼目』をテキストとした代語集である。峨山韶頌の名が冠せられ

ている抄物類には、『華開五葉』の外に、(1)大東急記念文庫所蔵『峨山百則』、(2)静岡県最福寺所蔵『小参之抄(総持二代和尚之下語)』・長野県大安寺所蔵『天童覚和尚小参抄』・群馬県渋川市雙林寺所蔵『天童和尚小参抄』等(3)『自得暉録抄』(熊本県円応寺所蔵本等)、(4)『山雲海月図』(円応寺所蔵・丈六寺所蔵本等)等がある。いずれも五位説をその内容として含むものである。『山雲海月図』についてみると、円応寺所蔵本および丈六寺所蔵本は、峨山派下の著語等が増補された可能性が高いものであるが、五位説や『人天眼目』関連の記述が見られる。

「史料編纂所本」には、「抄」「抄出」の説として、引用する箇所が多く見受けられることから、恐らくは先行する「漢文抄」あるいは「仮名抄」が存在し、川僧はその抄を傍らに置きつつ、講義したものとと思われる。また、「密参」の記述も見られることから、講義と平行して入室参禅が行われていたこともわかる。

『人天眼目川僧抄』における『人天眼目批卻集』(以下『批卻集』)の比重は極めて高い。『批卻集』序文によれば、物初大観の跋語と桂堂瓊林の刊語とをあげた後、その執筆の動機を曹洞宗に関する記事の誤りを正すことにあるとしている。また『批卻集』は元亨元年(一二三二)四月八日に成立し、応永二年(二四一四)に書写された。書写者「竹庵子」とは、恐らく臨済宗聖一派に属する竹庵大縁ではないかと推定する。

次に、五山における『人天眼目』の受容について、少しくふれてみたい。義堂周信の『空華日用工夫略集』応安三年八月四日の条に、披見の記事が見える。又、天英周賢は桃源瑞仙の『人天眼目抄』と『碧巖録抄』を梅室周叡に貸与しており、又桃源自身も月翁周鏡の求めに応じて、『人天眼目抄』を貸与している(文明八年正月)。桃源の抄が基づいたのは、建仁寺清隱庵の正宗□雅の講義を聴講した物であり、その逸文が雪岑津興の『頌詩』(東福寺靈雲院蔵)に見える。上記の梅室であるが、『蔭涼軒日録』長亨二年十二月十六日条に「大享妙亨―玉潭中堪―梅室」

と言う天竜寺華藏院の易の家伝に連なっており、易学に尤も長じていたとされる。興味深いのは、川僧自身もこの伝授に連なっていることである。川僧とほぼ同時代に活動した桃源瑞仙は易学の講義を長年に亘って行い、『百衲録』を選述している。又清原家の講義もこの前後の頃より盛んに行われている。京鎌倉の五山及び足利学校における易学の研究の伝統は、林下曹洞宗にも「曹洞五位説」の易学による解釈として流入していったと考えられる。

又、『臥雲日件録抜尤』に寛正元年三月廿日条、寛正五年五月四日条によれば、空谷明応に人天眼目の手沢本が存したことが窺われ、五山の禅林の中にも寛正五年の段階で林下の僧による解釈が参考にされていた事が分かる。

次に中世林下曹洞宗道元派下において、五山派系の抄物が受容をされた、ひとつの事例として静居寺所蔵『五燈會元畧鈔』を取り上げたい。<sup>4</sup> 本史料は幻住派明叟齊哲の法嗣無盡省燈による『人天眼目』の抄物である「灯無尽人天眼目鈔」を引用しており、又「五位説」に連関する明極楚俊派下春谷永蘭の法嗣斗南永傑書写本「寶鏡三昧註」が収載されている。ここに言う省燈が仮に『偏正五位圖説詰難』に見える省燈首座と同一人物とすれば、林下曹洞宗太原派下に属する南英謙宗(二三八七〜一四六〇)が論難した相手の相貌がおぼろげながら見えてくるように思う。

内部徴証により、『五燈會元畧鈔』二十卷の撰述者が、古教妙訓(曲江の法嗣、円覚寺百三十世、黄梅院塔主、夢休道人)であり、文安元年(一四四四)二月二十三日から文安三年(一四四六)三月二十二日にかけての二年間余りの時間を費やして本書を完成させたものであることが分かる。<sup>5</sup>

林下曹洞宗道元派下においては、永平寺三世徹通義介のものとされる西明寺所蔵『劫外録大乘開山徹通和尚之註』には五位説そのものは見出されないが、後世貫之梵鶴の『眞州長蘆了禪師劫外録抄』に引用されており、その萌芽を見出すことが出来る。又、永平寺五世義雲(一二五三〜一三三三)においても、『義雲録』に見られる『宏智録』依用の態度や、その五位説を継承した上堂語などによって、五位説に基づいた解釈がなされていたことが確認できる。

その後、特に峨山韶頌（二二七五～二二六五）によって五位説は、林下道元派下の曹洞宗旨の支柱の一つとして位置づけられたとされる。傑堂能勝（二三五五～一四二七）や南英謙宗（二三八七～一四六〇）の師資による五位説に関する体系的な研究は後の曹洞宗学に大きな影響を与えた。また、湖海中珊（南英法嗣、一三九〇～一四六九撰述『七夜話』（六地藏蔵）は、宝徳三年（一四五二）から享徳二年（一四五三）に至る期間に記録された、主に『人天眼目』の公案や語句をテキストとした代語集である。

又、『五燈會元畧鈔』卷十三の書写校合奥書に

文亀元年（辛酉）（二五〇二）霜月廿三日校了、住大洞繁詰六十四。

とあることから、本書は林下曹洞宗道元派下に属する静居寺開山賢忠繁哲（崇芝性俗の法嗣、一四二八～一五二二）によって文亀元年に書写された抄物である事がわかる。又、本書が基づいた五山版のテキストが、お茶の水図書館成實堂文庫に所蔵されている。

### 世阿弥「九位」の仏教学的背景

「九位」とは、世阿弥能楽伝書の一つであり、「九位住（注）」と題する前半部は、能のありようを九段階に分けて、妙花風・寵深花風・閑花風（以上「上三花」）、正花風・広精風・浅文風（以上「中三位」）、強細風・強鹿風・鹿鉛風（以上「下三位」）と名づけ、それぞれに禅の詩句などを用いてその風を説いており、後半部分は「九位習道の次第条々」で、習道論の視点から芸位について、浅文風から入門して、中三位より上三花を究めて、下三位に却来すべき習道の次第を論じている。成立は、『六義』（応永三十五年（一四二八）三月相伝）以前とされ、『拾玉得花』・『寛正本六

輪「露秘注」等元来は九位の各風に金性・銀性などの配当があつた可能性が指摘されている。

この書の形式は、林下曹洞宗における「本参」のそれに近似する。林下曹洞宗においては、嗣法伝授の前提として、参禅了畢が求められた。「本参」は『菩薩戒作法』や「切紙」とともに伝授され、嗣法の際に師資の間に秘密相伝される一連のものとして位置づけられていた。永平寺所蔵「以貫附法状」に以下のように見える。

於吉祥山永平禅寺丈室而、宗門之法則・法器等、不残一物、于新祖棟嗣資之也。聊不渡麈案秘訣矣。

如件

心心円一

一在無功

君臣合道

柳緑花紅

皆大永第七丁亥年仲春三日

現住祥山永平以貫（花押）

（朱印文「以貫」）

大永七年（二五二七）、永平寺室中において、現住持以貫から次の世代を担う祖棟（祚棟）へと「宗門之法則」と「法器」等が伝授されている。「宗門之法則」とは、宗門（林下曹洞宗）における相伝史料（切紙・本参を始めとして伝戒史料を含む）に該当し、「法器」は嗣法の証とされる法具（袈裟・鉢盂〔応量器〕・拄杖・扠子）を指すものと思われる。但し、ここでは鉢盂を主要な物として取り上げたとも解し得る。以貫の付法状に類似する形式のもの、祚棟にも残されており、「於吉祥山永平禅寺丈室、宗門之一大事因縁、儀軌・戒品、法器・杖扠、不遺一物、

祚玖首座伝附畢」と見えるからである。因みに祚棟には、別に伝法偈が残されている。

曹洞宗における公案参得の階梯は、通常は三段階で構成されている。その名称は、たとえば、「自己」「智不到」「那邊(那時)」、「あるいは「鉄」「銀」「金」、あるいは「最初」「中当」「向上」、さらには「二透」「三透」「三透」「初」「中」「後」とさまざまであるが、三段階の構成はほぼ各派共通と言える。これを広義には「三位」というが、狭義には「自己」「智不到」「那邊(那時)」その三位による、祖師の語句や機縁を体系化した物を「三位之透(さんいのおとり)」という。

「無極授月江記文」切紙によれば、美濃補陀寺の無極慧徹の会下にあつた月江正文が関東に赴くに際して、師の無極から示された旨訣とされるもので、その中で「三位之透」の項目及び由来が説かれている。<sup>(6)</sup>

叡山文庫所蔵『宗門密参』(眞如藏 百五十四惟)は、以下の記述から、天真派四派の一つ希明派下において参得されてきた「曹洞宗ノ(三位ノ)秘参」であることがわかる。希明派は、越前国(福井県)宅良慈眼寺開山天真自性を派祖とする、天真派四派の一つである。希明派下において参得されてきた「曹洞宗ノ(三位ノ)秘参」であることがわかる。

右此ノ書、曹洞宗ノ秘参ナリ。永平ノ室中不出ノ参ナリ。末派ニ、三位ノ扱イ、サマアレトモ、此ノ筋目参得ノ智識マレナリ。越前ノ国宅良開山天真ノ四派ニ、希明派ニ、此参得流布スルヲ以テ、山僧着ニ傳授スルナリ。麁子派ニ无シ。本書は、「夜参二十七透」の透句といえるが、本書の構成について以下のように言う。

私云、只タ三位トバカリ扣ク則シハ、自己ニモ、智不到ニモ、那時ニモ、師家ノ手ガラホド、古則ヲ引キ入テ扣クナリ。

ソレハ、独則ノ扱イナリ。サテ、三位ノ首句、三ツ九ツニ分ル則シハ、一段々々テ、修行ノ村ヲヌキ、功作ヲ知ン為タゾ。

亦九ツノ首句ヲ、廿七二分ツヲ、夜参廿七夜ト云タゾ。向去ガ九段、却来ガ九段、行李ガ九段デ、三九廿七段ナリ。○

廿七段ヲ五位ニツゞメ、五位ヲ三位ニツゞメタ。三位ハ二位ニツゞマルゾ。一位ハ、空体ナリ。大陽ノ玄十八般ノ妙語ヲハ、向去九段、却來九段ナリ。行李ハ、向去九段ノ中カニ含ムゾ。宏智和尚ノ八句ハ、前四句ハ向去ナリ。後ノ四句ハ却來ナリ。廓庵ノ十牛ハ、八牛ハ向去、一牛ハ裡頭ノ却來ナリ。入禍垂手ハ、却來ナリ。曹山八箇ノ妙語ハ、七圓ハ、向去也。一圓ハ、却來ナリ。石霜ノ七去モ、六去ハ向去ナリ。一去ハ、却來ナリ。曹洞宗ニ、向去。却來ノ分段ノ事数多在之。ヨクノ參ズベシ。ドレモ廿七段ヲヨク極ムレバ、一位ナリ。

これに依れば、「自己・智不到・那時」の三位に対して、それぞれに三つの「首句（かしらく）」が配当され九段になるが、更に「九ツノ首句ヲ、廿七ニ分ツヲ、夜參廿七夜」と言い、その内容は「向去ガ九段、却來ガ九段、行李ガ九段デ、三九廿七段」であるとする。

次曹洞廿七段之目錄

自己三段向去也。

(1) 自己之自己 万機休罷之透

【首句】万機休罷。 【挙処】一死更不再活。

(2) 自己之中 醒處之透

【首句】煩惱即菩提、生死即涅槃。 【挙処】通身無影像。

(3) 自己之向上 安心之透

【首句】深固幽遠無人能到。 【挙処】無心退得無心道、退得無心道也休。

智不到三段向去

(4) 智不到之最初 愚智之透



【首句】唯獨自明了。【举处】鉢盂向天底時節。

(5) 智不到之中道 妄智之透

【首句】天上天下唯我独尊。【举处】推与挽主車行。

(6) 智不到之向上 寂智之透

【首句】玉輪機轉笑呵々。【举处】琉璃殿上撲倒粉碎。

那時之三段向上（去力）

(7) 那時之最初 那邊之透

【首句】語帶玄無路、舌頭談非談。【举处】子還就父、々全不顧。

(8) 那時之最中 至到之折角透

【首句】蒼頡祖父寒坐位、白髮兒孫夜過門。【举处】王居門裡、臣不出戶。

(9) 那時之向上 相續之透

【首句】二頭松鷄点火燭、師資相逢心法傳。【举处】根莖牽實血脉貫通、金鎖連環相統不斷。

向去終

却來九段・出派

(10) 自己之自己 位裡点側之透

【首句】莫守寒岩巽草青。【举处】依那邊不留、閑田地不守。

(11) 却來之自己之中 化度之透

【首句】倒騎白額兒、突出衆人前。【举处】養子順不得摩捺、棒要殺喝要耳聾。

(12) 却來之自己向上 為人之悉曇之透

【首句】偏中有正々中偏、流落人間千百年。 【挙処】自携淨去<sub>テ</sub>沾村酒、□却著衫來成主人。

却來智不到三段

(13) 却來智不到最初 禪定三昧之透

【首句】寒炉無火獨虛臥、涼夜無燭到天明。 【挙処】釣絲午夜休拈弄、風拭湖光水月秋。

(14) 却來智不到中道

【首句】月船不犯東西岸。 【挙処】不欲犯中。

(15) 却來智不到向上

【首句】玉馬吞乾明月泉、泥中牛耕瑠璃地。 【挙処】凡聖脱尽シテ意皆ナ空ナリ、有佛<sub>ノ</sub>處<sub>ニ</sub>不用邀遊。

却來那時最初

(16) 却來那時最初 孝滿之透

【首句】揭開金鎖看裡頭、陰々風光本自異<sub>リ</sub>。 須知雲外千峰上、別有靈松帶露寒。

(17) 却來那時中道 賓主不到之透

【首句】重幃勝負休、金殿臥清風。 【挙処】機尽功忘恩儀断、便成不孝闍提人。

(18) 却來那時向上 仙境之透

【首句】透過那邊看、猶有出身路。 【挙処】仙家不會論春夏、石爛松枯是一年。

行李九段出派

(19) 行李自己最初 村裡底之透

【首句】百性日用不知。【举处】時夜清雲殿上人、今朝販来弄泥團。

(20) 行李自己中 村裡底醒處之透

【首句】五帝三皇是何物、稼穡艱難總不知。【举处】太平事業無象、野老家風至順タリ。

(21) 行李自己向上 村裡底無事之透

【首句】百花繚亂可被笑、比来天地一閑人。【举处】昨夜睡眠何処用ソ、蓑衣猶帶野苑香キコトフ。

行李智不到三段

(22) 行李智不到最初 入派將軍之透

【首句】帝城勅展則、每持尊言三閣。【举处】籌運帷幄中、勝決千里外。

(23) 行李智不到中道 將軍汗馬功之透

【首句】乘肥馬披輕裘。【举处】太平扶佐天子、卒土鎮安民姓。

(24) 行李智不到向上 將軍功極之透

【首句】功成不處、電火難追。【举处】一戰功成早制身、釣竿輕動五湖雲。

行李那時三段

(25) 行李那時最初 王道不点之透

【首句】積代簪纓者、休謂落魄時キ。【举处】當処便是法王城。

(26) 行李那時之中 王道本文之透

【首句】天然貴胤本不功。【举处】爵持黙々坐。

(27) 行李那時極則 王化德用之透

【首句】徳合乾坤育勢隆ナリ。【拳処】春ハ青陽タリ、風氣温和。秋ハ白象タリ、風氣清涼タリ。

目録終 　　向去之終

曹洞三位に配される透句の種類は多く、又その組み合わせも多様である。それは、道元派下の各派毎に独自の体系が三位説についても形成されていたことを示すものと言える。本書の特徴の一つは、天真派下の希明派に相伝してきた「夜參二十七段」であることが明確であり、それぞれの段に配された「首句」「頭句」ともと、師の謬語によつて導き出される「拳処」（「着語」「取句」とも）が一つの句に限定されている点にある。更に、「首句」と「拳処」とに対する註釈、又その段の意味づけは、「心得」として説明される。

#### 参考文献

#### 【『人天眼目』関係】

川瀬二馬『五山版の研究』上下二冊、日本古書協会、一九七〇年。

『岩崎文庫貴重書誌解題Ⅰ』、財団法人東洋文庫、一九九〇年。

椎名宏雄『宋元版禅籍の研究』、大東出版社、一九九三年。

同 右「人天眼目」の諸本』『宗学研究』二〇号、一九七八年。

同 右「高麗版『人天眼目』とその資料」『駒沢大学仏教学部研究紀要』四四号、一九八六年。

岩井大慧『麗版『人天眼目』とその種々版考』『和田博士古稀記念 東洋史論叢』、一九六一年。

『積翠軒文庫善本書目』本文編、二二四～二三頁、凶録編、番号四三三、臨川書店、一九八一年。

#### 【『人天眼目抄』関係】

金田弘『洞門抄物と国語研究』、桜楓社、一九七六年。

安藤嘉則『中世禅宗文献の研究』、国書刊行会、二〇〇〇年。

石川力山『禅宗相伝史料の研究 上・下巻』、法蔵館、二〇〇二年。

中田祝夫編『抄物大系』『人天眼目抄』、勉誠社、一九七五年。

『松ヶ岡文庫所蔵禅籍抄物集』人天眼目抄 乾坤』、岩波書店、一九七六年。

石川力山『人天眼目抄』について、『日本印度学仏教学研究』二六―二七号、一九七八年

外山映次「二つの人天眼目抄——西福寺蔵本と川僧抄と——」、『川瀬一馬博士古稀記念』国語国文学論集』、一九七九年。

坪井美樹「人天眼目川僧抄三本私見——内部徴証から史料本と足利本・松岡本との関係を考える」、『千葉大学教育学部研究紀要』二八号、一九七九年。

柳田征司「日光山天海蔵『人天眼目聞書』と常州佐竹における抄物作成活動」、『室町時代語資料としての抄物の研究』（下冊）第九章第二節、武蔵野書院、一九九八年。

拙稿「大東急記念文庫蔵『人天眼目批卻集』について——『人天眼目抄』における位置づけを中心にして——」、『駒沢大学仏教学部論集』二七号、一九九七年。

拙稿「中世曹洞宗における『人天眼目』の受容について（一）（二）」、『曹洞宗研究員研究紀要』二七―二八号、一九九六―一九九七年。

松田陽司「五位説と道元禅師——五位文献に見る道元禅師の五位説批判——」、『道元禅師研究論集』、大本山永平寺、二〇〇二年。

外山映次「遠州一雲齋三世川僧慧濟禅師年譜稿」（『埼玉大学紀要』教育学部）人文・社会科学』二四号、一九七五年。

古田紹欽「川僧慧濟について」『禪研究所紀要』愛知学院創立百周年記念 六・七号、一九七六年。

安藤嘉則「川僧慧濟の『無門関抄』について」『宗学研究』四二号、一九九九年。

同 右「川僧慧濟の語録と無門関抄」〈財団法人〉松ヶ岡文庫研究年報 二三号、一九九九年。

石川力山「真州長芦了禪師劫外録抄」の研究(上)(中)(下)、『駒沢大学仏教学部論集』二五―二六号、一九九四、一九九七年。

### 【『五燈會元畧鈔』関係】

芳賀幸四郎「中世禅林の学問及び文学に関する研究」第一編第三章第一節「僧史・僧伝に関する関心」(思文閣出版、一九八一年)

緒方香州「禅宗史籍の註釈について——五灯会元抄を中心として——」(『禅学研究』五九、一九七八)。

拙稿「静居寺所蔵『五灯会元略鈔』について——『五灯会元鈔』に関する覚え書き——」(『禅学研究の諸相：田

中良昭博士古稀記念論集』大東出版社、二〇〇三年)。

### 【『山雲海月』関係】

石川力山「肥前円応寺所蔵の『山雲海月図』について」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第二号、一九七九・八)

同 右「峨山和尚『山雲海月』について」(『日本印度學仏教学研究』第二八卷二号、一九八〇・三)

同 右「禅宗相伝資料・切紙資料を中心とする日本中世仏教の社会的機能に関する研究」(平成7年度から平成8年度科学研究費補助金(基盤研究(C))、一九九七・三)

拙稿「円応寺蔵『山雲海月圖』について」(『曹洞宗研究員研究紀要』第二九号、一九九八・二)

円応寺蔵『山雲海月圖』と同系統の写本に徳島県丈六寺所蔵本がある。丈六寺蔵本の奥書に「前総持心龍書之／

于時享祿三年八月二十八日」とあり、享祿三年（二五三〇）書写であることが解る。

田島柏堂「新資料・峨山韶碩禪師のカナ法語について」（『印度學佛教學研究』第四卷二号、一九六六・三）

椎名宏雄「峨山カナ法語の性格」（『宗学研究』第十九号、一九七七・三）

同 右 「五 仮名法語の展開」（『道元思想のあゆみ 2 南北朝・室町時代』二二八～二五六頁、一九九三・七）

『續曹洞宗全書』所収の「峨山和尚法語（一）（二）」及び「峨山和尚過眼集」は、お茶の水図書館成篋堂文庫所蔵『峨山和尚法語』に収載されているものである。既に椎名宏雄氏が指摘されているように、禪籍抄物としての性格を有するものである。本書は、天寧寺（京都府福知山市、臨濟宗妙心寺派）旧蔵本であり、長祿四年（二四六〇）に書写されたものである。他に「峨山和尚法語」とされるものが、茨城県六地藏寺に所蔵されている。

## 註

（1）落合博志「禪的環境——東福寺その他」（『國文學・解釈と教材の研究』三五卷三号、「世阿弥——都市の言葉、都市の劇場〈特集〉・世阿弥のいる場所」、學燈社「編」、一九九〇・三）

重田みち「岐陽方秀と世阿弥の交流と「二」への意識」（天野文雄監修『禪からみた日本中世の文化と社会』、二〇二六・七、ペリカン社）

（2）『自戒集』には、「養叟宗頤の五種行」として以下の記述がある。「康正元年ノ秋ノ末、養叟、泉ノ堺ニ、新菴ヲ建立ス。菴号ヲ、陽春菴ト云。異名ヲ、養叟ノ入室屋ト云。同十二月ニ堺ヘ下向アリテ、安座・點眼、菴ヒラキニ、五種行ヲ行フ。二二八入室、二二八垂示・着語、二二八臨濟録ノ談義、二二八參禪、二二八人ニ得法ヲオシウ。ソノヘンノ狂客、無住榜ヲツカマツリ候。ソノ無柱榜ニ云」と見える。

(3) 「雲箇水箇、真箇の参究は求覓せんは、切忌すらくは五家の乱称を記持することなかれ。いはんや、三玄三要・四料揀・四照用・九帶等あらんや。いはんや三句・五位・十道真智あらんや」。(岩波文庫『正法眼蔵』一三三頁)

「智聰といふ小兒子ありて、祖師の一道両道をひろひあつめて、五家の宗派といひ、『人天眼目』となづく。人これをわきまへず、初心晩学のやから、まこととおもひて、衣領にかくしもてるもあり。人天眼目にあらず、人天の眼目をくりますなり。いかでか瞎却正法眼蔵の功德あらん。かの『人天眼目』は、智聰上座、淳熙戊申十二月のころ、天台山万年寺にして編集せり。後來の所作なりとも、道是あらば聴許すべし。これは狂乱なり、愚暗なり。参学眼なし、行脚眼なし、いはんや見仏祖眼あらんや。もちゐるべからず。智聰といふふべからず、愚昧といふべし。その人を知らず、人にはあはざるが言句をあつめて、その人とある人の言句をひろはず。しりぬ、人をしらずといふことを」。(同右三八〜九頁)

川僧慧濟はこの道元の言葉をとつて受けたのであろうか。「師語話而云、大慧ノ末へノ批判ニ、明月前ハ是黒、不言黒、又老婆頭白、不説白、而言老婆白在其中。是ヲ見テ、永平和尚ハ、此ハ是レ人天ノ盲目ナリト云テ、抛擲ト云云」。

(東大史料編纂所蔵本『人天眼目抄』二七〇頁)

(4) 静居寺は開創当時は大沢山静居院と呼称されていたが、九世天桂伝尊の時代、東阜心越の薦めによつて今日の青原山静居寺と寺名を改めた。静居寺には、この外にも、近世初期の本参・切紙資料が所蔵されており、特に曹洞五位説、三位説関連史料を含むものであり、賢仲派としての教学的背景を知る上でも貴重な資料である。

(5) 本書は『五燈會元』二十巻全体にわたつての、漢文による詳細な註釈書である。しかしながら本書は、早くから破損散逸し、巻六、十五、十七、十九の各巻が失われており、順序次第にも混乱を生じている。巻三「表紙題箋」には、「御眞跡會元鈔〈散乱拾集〉作此一冊」とあり、見返しには以下のように見える。「散乱拾集」此冊者、前后混雜尤甚。雖然從往古表紙無之故、為風塵數多紛失ス、故今至庚申之夏、作合巻、備表紙、以成十冊、收筐中。後薰亦護念、虫干之節、



可心痛者也。／現住二十四世自改之。

(6) 無極慧徹から月江正文に与えられたとされる記文は、本参・切紙においては「曹洞三位」説の根拠として用いられてきた。上記の記述に依れば、無極は、まさに会下を離れ坂東（関東）に下つて行こうとする法嗣月江に對して、その教化に用いるべき本参として上記の三位の次第を指し示したとされる。無極の師無著妙融（二三三三～二三九三）は、現今の曹洞派下の諸師は、名聞利養に走り、自己の見解を誇り我慢を長じているが、曹洞宗旨の秘極にはその十分の一すら会得してはいないと批判して、以下のことを語つたという。無底良韶（二三二六～三三六一）は、雲外雲岫（二四二～二三二四）会下の玄芳首座に参じ、「八種自己、八種智不到、八種那邊那時袋訛妙訣、廿五種良久品様、十二種之參數」の旨を得ると共に、また「三種の根器を以てその人を定」むべきことを指示されたとされる。更に無底は、明峰素哲会下の大智首座に参ずる事によつて、中国の宏智・真歇両派の源脈を踏まえると共に、日本の峨山・明峰両派の要訣を体得したという。このような相伝の系譜を持つ本参が、「曹洞三位」であるとされる。

〔追記〕

本論文は、『禅と心』研究の学際的国際的拠点づくりとブランド化事業の一貫として、『禅（ZEN）の源流および文化の研究』グループの研究成果の一端です。